トム・アンダーソンによるスクラッチの教育実践

－クレヨンと墨を使ったスクラッチの指導過程－

The Teaching Practice of Scratch by Tom Anderson

－The Teaching Method of Scratch Using Crayon and Indian Ink on Paper－

辻　　泰秀
TSUJI Yasuhide

1．はじめに

本稿では，絵画教育の実践事例として，フロリダ州立大学のトム・アンダーソン教授[1]よって紹介された，クレヨンと墨を用いたスクラッチ（ひっかき画）の実践について取り上げる。

岐阜県美濃市では，毎年海外のアーティストを５人程招いてアーティスト・イン・レジデンス事業を行うなど，美術を通した国際交流に継続的に取り組んでいる[2]。子どもたちが海外のアーティストと一緒に造形活動をすることによって，美術の楽しさを体験するとともに国際文化理解の機会になっている。おりしも，2004年度は市制施行50周年にあたり，その記念イベントの中で，アメリカの美術教育研究者として著名なトム・アンダーソン教授を招聘することになった。

筆者は岐阜大学の学生や市民ボランティアの協力を得ながら，日常的に各地区の子ども公民館や美濃市文化会館の教育普及活動を行っている。そのことが評価を受け，市制施行50周年記念事業である「国際子どもワークショップ in 美濃－トム・アンダーソン招聘事業－」の実行委員長を担当し，関連する造形ワークショップの企画と運営をさせていただいた。トム・アンダーソン教授は2004年８月９日から24日まで美濃市に滞在をして，美術教育に関するシンポジウムや美濃市の子どもたちを対象にした教育実践を行った[3]。スクラッチの実践は，８月11日（水）と12日（木）の２日間にわたって実施された。

氏は，国際的な平和壁画運動であるキッズ・ゲルニカの提唱者である。キッズ・ゲルニカは，ピカソの大作ゲルニカと同じサイズの画面に，世界各地の子どもたちが平和をテーマとした共同製作を行うものである[4]。日本の小学校図工科の教科書にも幾度か記載されている[5]。そのため，トム・アンダーソン教授の来日に際して，キッズ・ゲルニカの実践を行ってみてはどうかという意見もあった。キッズ・ゲルニカは興味深い内容ではあるが，市制施行50周年記念事業ということもあり，日本で広く知られているものよりも，美濃市から発信できる実践がよいのではという結論になった。

子どもたちと共に活動したい内容は何かということで，事前にトム・アンダーソン教授とインターネットを使って情報交換をしたところ，クレヨンを使ったひっかき画を指導してみたいという提案があった。クレヨンは子どもたちにとって身近な描画材料であるだけに，その可能性を引き出すことに意味がある。そして，描くことに加えてひっかいたり削ったりしながら表現していくことに面白さが存在している。そこで，筆者が「クレヨン・スクラッチ」と題材名をつけ，トム・アンダーソン教授を迎えて主に美濃市の子どもたちを対象にして実践をすることになった。

日本とアメリカとでは，言語・子どもの実態・指導形態・材料や用具をはじめ様々な点が異なるはずである。それにもかかわらず，アメリカと教育環境が異なる美濃市での実践を快諾下さったことに感謝したい。本稿では，２日間にわたる指導内容を中心に述べることにする。

２．材料や用具等の事前準備

2004年８月の夏期休暇中に実施するにあたって，７月下旬の１学期の終業式までに参加者募集のプリントを市内の小・中学校を通して配布することになった。学校・学年・学級の枠をはずして自由に参加できることにした。プリントに造形ワークショップの簡単な紹介を記すことから，トム・アンダーソン教授に実践概要の送付をお願いした。

筆者は2002年の９月から11月にかけてフロリダ州立大学においてアメリカの美術教育の調査を行っているので，その機会に美濃市の地域文化や子どもたちを対象としたワークショップの趣旨などについてトム・アンダーソン教授に伝えている。それ以前に，氏は学会での講演[6]やキッズ・ゲルニカの実践などで幾度か来日しているので，日本の子どもたちの造形表現の実態に関する予備知識をもっていた。

トム・アンダーソン教授から提案のあった実践の特徴は，クレヨンによるひっかき画の過程で墨汁を塗っていることである。日本では下地の上に黒色のクレパス（ソフトクレヨン）を重ねて塗るか，既成の黒のボードを使用している。クレパスの場合はどうしてもネバネバした感じが残るし，市販されているスクラッチボートは繊細な表現が求められ高価でもある。墨汁を塗るというのは，水墨画や書道で墨を使い慣れている日本でさえ，ほとんど見受けられない技法である[7]。氏の知人のアメリカの美術教育研究者が墨汁を塗る方法を取り入れ，自身もアメリカやチェコの子どもたちに指導をしたという。その教材を日本でも試みることになる。

あらかじめ実践に伴う準備物や概要ということでトム・アンダーソン教授から伝えられた内容は，下記のようである。

○　クレヨンによるひっかき画 (crayon engraving) をする。
○　２日間にわたって１日４時間ずつの計８時間の制作をしたい。
○　人数は，10人程度であまり多くない方がよい。
○　描画指導を受けている子どもの方が望ましい。
○　用意するものは，上質の白の画用紙，何本かの中くらいの堅さの鉛筆，多色の上質のワックス・クレヨン，上質の黒のインク(India ink)とやわらかくて中くらいのサイズのハケ，ボディーパウダーかチョークの粉，インクの下のクレヨンを出せるようなひっかく用具，子どもたちが描く動物のイメージを投影できるＬＣＤプロジェクター。

クレヨンの原材料がワックスであることは商品に表示されてはいるが，改めてワックス・クレヨンとは日本では通常言わない。そして，インディア・インクがどのような材質のものなのか慣れないためによくわからなかった。そのため，来日直後，話をしながら確認した準備物は次の通りである。

2 pieces A-4 paper (good quality)	Ａ４サイズの良質の画用紙を各２枚
pencil	鉛筆
crayons (bright colors but not metalic)	クレヨンのセット（明るい色，金銀以外）
ink (at least a liter)	インク（墨汁　最低１リットル）
kitchen detergent	食器洗剤
brushes　20	はけ20本程
small containers	インク用容器
talcum powder (body powder)	ボディーパウダー
40 finger nail files	爪のお手入れ用ヤスリ　40本程
some kitchen knives	キッチンナイフ

oil pastels　　オイル・パステル（クレパス）

日本の教科書に記載されている教材では，準備物を見れば指導経験から実践の内容や展開が推測できる。今回の場合，準備物としてトム・アンダーソン教授から伝えられたインク，ボディーパウダー，食器洗剤をどのように使用するのかといったことが理解できなかった。これらを単純に容器で混ぜ合わせれば，泡や粉まじりの黒色の液体ができ上がり，画材にはなりそうもない。また，クレヨンとオイル・パステルの違いも明確ではなかった。オイル・パステルはクレパスのようにクレヨンよりも柔らかい材質のものであると推察した。

日本の学校で日常的に使用している画材でも，同様なものが海外ではあまり見当たらないことがある。たとえば日本では各自が12色程度のチューブ入りの水彩絵の具やポスターカラーをもっている。フロリダ州の学校では，固形状になった絵の具を共同利用していた。パレットの端に並んだ固形の絵の具を水で溶かして使うので，絵の具の濃度や混色の方法が日本とは異なってくる。また，ボトルに入ったテンペラ絵の具が美術室の棚に並んでいて，それが日本のポスターカラーの役割をしているようである。日本では，テンペラ絵の具は美術系の大学でもそれほど多くは使用していない。すなわち，一口に絵の具とっていっても，日本と海外とでは，材質や使い方が異なるわけである。

当初インク（インディア・インク）は文字通りインクと誤解し，中性の版画用のインクも準備していたが，打ち合わせの中で，版画やデザインで用いるインクではなく墨汁であることに気づいた。

エングレービングは，西洋版画や彫刻などで刻んだり彫り込んだりするときに使用する用語である。今回は画面をひっかくという意味で，日本でも一般的になっているスクラッチに近いと考えた。ただし，準備物等からすると，日本の学校で行われているスクラッチとは相違がある。主に幼児や小学校低学年でのスクラッチは，画用紙に様々な色のクレパスを塗った上に黒色のクレパスを塗る。さらにとがったものでひっかくと黒色のクレパスがとれて下地の色が見えるというものである。使用するのは，主にクレパスである[8)]。クレパスは材質的にはクレヨンと似ているが，クレヨンよりも柔らかいので，ひっかいて下地の色を出すのに適している。

また，中学校などで取り扱われているスクラッチは，あらかじめ黒色のインクが塗られたボード（厚紙・塩ビ板・ガラスなど）に，鋭利な用具でひっかいていくものである。銅版画のような線の効果を得ることができるが，それだけに繊細な表現力が求められる。購入時に既につや消し状態のインクが塗ってあることもあって，学校教材としては高価である。

トム・アンダーソン教授は，８月９日の晩に来日し11日と12日に実践をするというスケジュールであった。改めて材料を確認し注文する日程的な余裕はないので，とりあえず分かる範囲で準備物をそろえておき，追加が出てきたときには，来日後の10日に画材店やホームセンターの店頭で購入する段取りにした。

画用紙についてはＡ４程度ということであったので，八つ切りサイズのものを２種類準備した。１枚はクレヨンを塗り込む下地用のやや厚い画用紙で，もう１枚は，図案のスケッチを描くもので普通の厚さである。描画材料については，20色入りのクレヨンとクレパスをそれぞれ準備した。画用紙の上に描いてみたりひっかいたりして試した結果，クレヨンは，下地用に適していることがわかった。そして，クレパスは柔らかいので，下地用ではなく転写のときに使用することになった。

直前の準備でとくに配慮したのは，ひっかく用具についてである。爪の手入れをするためのヤスリといっても，形状や大きさは多様である。少なくとも各自１本は必要である。そのため比較的大きな100円ショップに行き，化粧品や大工道具の戸棚にある７種類程のうちからトム・アンダーソン教授が選択したものを購入した。ヤスリというよりはナイフのような形状のものである。既にもっていたニードルについては，先が鋭く線が細くなりすぎるので不向きということであった。

来日後間もない時期にトム・アンダーソン教授の実践を設定したのは，小学校の図工教育関係者か

らの要請によるものである。トム・アンダーソン教授は，美術批評や美術を通した国際文化理解を専門とする美術教育の研究者であり，普段は大学院博士課程の理論的な講義を担当している。日本でも大学の研究者が直接小学生を教えることは稀であるが，今回はあえてお願いすることになった。英語で難解な講義を聞いてもよくわからない。理論よりもまず子どもたちを対象とする具体的な実践を示してほしい，という学校関係者の要望からである。

画用紙に塗った墨汁を乾燥させるため，夏期休暇中の８月11日と12日の２日間にわたって１日４時間づつの計８時間の日程で美濃市文化会館で実施することになった。対象は主に美濃市内の小学生である。美濃市文化会館が会場になったのは，トム・アンダーソン教授の招聘事業の事務局であり子ども造形ワークショップを開催した実績があること，夏休み中で学校よりも社会教育施設の方が使用しやすく冷房や映像装置等の教育環境がよいこと，市の中心部にあり各地区から参加しやすいことなどである。

３．１日目の実践の内容

（１）１日目の午前中の活動（２時間）―動物の図案づくり―

当日に参加した子どもたちは，小学校１年～６年生の45名程であり，トム・アンダーソン教授に通訳・図工美術教育関係者・小学校の教諭・大学生など15名程が加わって支援することになった。トム・アンダーソン教授は，当初10～15名程の小人数を希望していたが，ティーム・ティーチングによって人数的な問題は一応解決できた。ちなみに，フロリダ州の多くの小学校では，20名以下のクラス編成であり，３～４人が同じテーブルで造形活動を行う形式が多い。

海外からのゲスト・ティーチャーの助言や指導内容を子どもたちに伝えるには，通訳が大切である。直訳するだけでなく，子どもたちの理解度に応じて話し方を変えたり言葉を付け加えたりする工夫が必要になる。今回も２日間にわたって現職の英語教諭やアーティスト・イン・レジデンス事業で子どもたちへの支援の経験が豊富な方を通訳としてお願いできたことは幸いであった。また，一斉指導はトム・アンダーソン教授が行うことになるが，図案の描き方・クレヨンの使い方・スクラッチの方法といった技法面での個別指導で，学校教育に携わっている先生方にもお世話になった。

午前中２時間，午後２時間の予定で実践が始まった。まず「クレヨン・スクラッチ」をどのように表現していくのか，という作品づくりのイメージを子どもたちがもつことができるように作品例を示した。トム・アンダーソン教授からスライド・プロジェクターでできるたけ鮮明に資料提示をしたいという希望があり，ステージ上の映画用スクリーンを使用することになった。完成作品をはじめに見せるというのは，子どもの発想や創造性を重視する日本では，幾分抵抗感がある。アメリカでは鑑賞や美術批評をしながらしだいに自己の表現を形成していくことから[9]，導入時に参考作品や作家の作品を示す場合が多い。

作品例を鑑賞した後に，ワニ・ゾウ・アヒル・ブタ・トリ・トラ・キリンといった動物の写真をスライド・プロジェクターを使って見せ，どの動物が好きかを子どもたちに選択させた。好きな動物一つに手をあげて，多い順に三つを子どもたちが描くモチーフにすることにした。今回は，ワニ・ゾウ・くちばしの長いトリが子どもたちに好まれた。動物は形に変化があるし，子どもたちにとって親しみのわくモチーフである。あらかじめモチーフを限定することには異論があるかもしれないが，白い画用紙に何でも描いてよいという設定よりも，かえって分やりやすい。

まず，ワニのスライド写真を見ながら，八つ切りの白い画用紙の中央付近に４Ｂの鉛筆でワニを描く。ワニのまわりのふくらみやへこみなど輪郭線に着目しながらゆっくりと描くことにした。陰影は描かずに，輪郭線のみをしっかりと描くようにする。しばらくしてワニが描けてきたら，ゾウをワニの輪郭線の上に重ねて描く。重なりはゾウが上になっても下になってもよいし，ゾウとワニは，どちらが大きくなってもかまわない。必要に応じて消しゴムをつかってもよい。次にくちばしの長いトリ

を画面の空いた所に描くことになった。トム・アンダーソン教授は，画面全体を見渡してトリの大きさや余白のバランスを考えるように助言をした（図１・図２）。

動物を三つにすることやワニとゾウを重ねて描くようにするという条件設定は，トム・アンダーソン教授の指導経験によるものである。モチーフを自由に選択することにすると，何を描いたらよいのかで戸惑う子どもが多くでてくる。スライドなどの参考資料を見ながら描いていく方法は，表現が類型化してしまいそうであるが，子どもたちは全てをうつしとるというよりは，創意工夫を加えている様子であった。さらにワニ・ゾウ・トリの三つの動物の形・大きさ・配置に一人ひとりの表現の違い（個性）が見受けらるようになった。

図１．トム・アンダーソン教授の指導で動物の図案を描く

図２．指導者と通訳（左端）がティームティーチングで助言をする

（２）１日目の午後の活動（２時間）―クレヨンと墨汁による下地づくり―

午前中に三つの動物のスケッチを描き，午後にもう１枚の八つ切りの画用紙を使ってクレヨンで色彩的な模様を描いた。まず，アンダーソン教授は，子どもたちを近くに集めて二つの模様の描き方を示した。動物の形を意識する方法と，動物の形にとらわれずに自由に模様を描いていく方法である。

動物の形を意識する方法（図３・図４）では，午前中に描いた動物のスケッチをもとにして，おおよその外形をクレヨンで描く。そして，動物の輪郭線の周りを好みの形や色でうめていく。この方法では，動物（今回は，ワニとゾウとトリ）の輪郭線の重なりと，さらに下地のクレヨンの色の重なりが交互に見えてくる錯視的な表現効果を得ることになる。

図３．動物の形の周りに模様を描く方法を描きながら伝える

図４．動物と周りの余白をいろいろなクレヨンで塗る

ここでの動物の形は午前中に描いたスケッチようにしっかりとかく必要はなく，むしろ位置や形が

多少ずれていてもよい。おおよその動物の形が描けたら，トム・アンダーソン教授は，動物の周りの余白に光が広がって行くような形や丸い形の模様を描いて見せた。子どもたちは，動物は一生懸命に描くが，背景は大きく余してしまうことがある。スクラッチの場合には，背景の部分にも手を加えて下地のクレヨンの色や模様を生かすようにすると効果的である。

動物の形にとらわれずに自由に模様を描いていく方法（スクリブル・ドゥローイング）では，画面全体が埋まるように渦巻き・光線・曲線などの模様を次々と描いていく（図５・図６）。クレヨンで自由に模様を描くおもしろさがある。クレヨンで模様を描く際になされたトム・アンダーソン教授の助言の内容は，明るい色を使う，次々と色の模様をかえる，画用紙の白地が見えなくなるようにクレヨンで塗るといったことである。

図５．自由に線を描いて，それぞれの部分を色をかえて塗っていく

図６．色の模様で画面がうまっていく

「明るい色を使う」

クレヨンで模様を描いた部分は，墨汁を塗った黒い面を後でひっかいたときに出てくる所である。そのため，赤・黄色・黄緑・オレンジ・ピンクなどの明るめの色を塗るとひっかいたときにきれいな線になる。黒・茶・紫・白等は，墨や画用紙の色に近いので目立だない。

「次々と色の模様をかえる」

一つの色の模様を大きく描くよりも，色が変化するようにクレヨンで塗る。ひっかいたときに下地の色が多様に変化していく方が美しく見える。一応の目安として６～７色は使うことにした。

「画用紙の白地が見えなくなるようにクレヨンで塗る」

クレヨンが薄いとひっかいたときに画用紙の白地が直接でてきてしまったり，墨汁が染み込んで都合よくひっかけないときがある。白いところがなくなるまで画面全体をクレヨンでベタ塗りに近い状態にする。

トム・アンダーソン教授は，子どもたちを集めて実際にクレヨンで描きながらゆっくりと話をしていたので，小学生の子どもたちでも具体的で理解しやすかった。氏のユーモアや動作を交えた話し方に，子どもたちは親しみをもって接していた。画用紙にクレヨンで線を描くことに戸惑っている子どもたちには，既にのびやかに線を描いている子どもの作品を示して，自由に描いてよいことを再度伝えた。

画用紙が様々な色でうまってきたら上からベビーパウダー（シッカロール）を振りかける（図７）。そして，指や手のひらを使ってクレヨンの光沢が完全に隠れるまでパウダーをこすりつける（図８）。

なぜベビーパウダーを使用するのか，どの程度の分量がよいのかは，今のところよくわからない。トム・アンダーソン教授のコメントを参考に推察すると，クレヨンの発色をおさえて下地が浮き出ないようにしたり，クレヨンの上に水性の画材を直接塗るとはじいたり塗りむらができるので粒子の細かい膜をつくっておくためであろう。分量は多めにしても大丈夫である。

トム・アンダーソン教授は，子どもたちを集めて「大切なプロセスだよ」といいながらベビーパウダーを塗る方法を示した。子どもたちは，クレヨンが塗られた絵が半透明に変化する様子を興味深げに見つめていた。

図７．シッカロールの粉を塗りつける

図８．画面が半透明の状態になる

ベビーパウダーをこすりつけた後，ハケで墨汁を塗る（図９・図10）。ニスや絵の具を塗る３cm幅の柔らか目のハケを準備した。塗る墨汁は市販の書道用のもので，墨汁200ml程に食器洗い洗剤を２～３滴入れておく。洗剤には界面活性剤が含まれており，洗剤を入れるとハケの動きがスムーズであったり墨の定着がよい。ただし，入れ過ぎると乾いた後に微妙に光沢ができたり強くひっかいても表面の墨汁が削れないことがある。クレヨンの固まりがくっついている部分は，墨汁を塗る前に取り除いておくとよい。墨汁は服につくとなかなかとれないので，注意を促した。墨汁を塗ると画面が真っ黒になって，絵の上下左右や作者がわからなくなるので，裏面に名前と絵の方向を示す矢印を記入した。

クレヨンで色とりどりに塗った画面を黒一色で塗ってしまうことは，普通は決心のいることである。子どもたちは後で黒色の画面をひっかいてもう一度カラフルな下地を出すことを導入時に理解しているので，むしろ画面の変化を楽しんでいる様子であった。従来のように黒色のクレパスを塗り付ける方法では，粘り気が残ったり削りかすが手について汚れたりする。墨汁の場合には，つや消し状態に近い落ち着いた光沢の平坦な画面を得ることができる。

墨汁が完全に乾かないとひっかくことができないため，１日間隔をあけることになる。時間がとれなかった子どもには，ドライヤーを使って乾かすことを試みたが，自然乾燥と比べると墨汁がくっついてひっかくのに都合が悪いようであった。クレヨン，ベビーパウダー，墨汁などで机や床が汚れるので，あらかじめ新聞紙やシートを敷いてカバーをするとよい。

図９．墨汁の塗り方を示す。

図10. シッカロールつけた後に，墨汁を塗る。

４．２日目の実践の内容

（１）２日目の午前の活動（２時間）―図案の転写とスクラッチ―

１日目の午前中に描いた動物の絵（下絵）の裏に黄・白・桃色・オレンジなど明る目の色のクレパス（ソフトクレヨン）を全体に塗りつける（図11・図12)。画用紙の裏面にクレパスを塗ることで，カーボン紙のかわりにする。画用紙に墨を塗り付けてあるので，黒色のカーボン紙では線がわからないしサイズ的にも足りない。そこで，柔らかくて粘り気のある明るい色のクレパス（ソフトクレヨン）を塗って，線を転写する。

図11. 動物の図案の裏にクレパスを塗る

図12. 表現の過程を実技をしながら伝える

１日目の下地づくりにはクレヨン（ハードクレヨン）で２日目の転写にはクレパス（ソフトクレヨン）を使用する。クレパスは１日目のクレヨンほどしっかり塗り付けなくてもよい。画用紙を光に当てて透かして見れば，輪郭線の位置にクレパスがついているか確認できる。動物の絵の裏にクレパス（ソフトクレヨン）が塗れたら，墨を塗ったもう一枚の画用紙と重ね合わせる。クレパスと墨の画面が接するようにして，画用紙の上を二ヵ所程度セロテープで留めてずれないようにする。

ワニ・ゾウ・トリ等の動物の輪郭線を鉛筆でゆっくりとなぞると（図13)，裏面のクレパスがカーボン紙の役割をはたして，墨汁が塗ってある面に動物の図案が転写される。鉛筆でなぞるときに力を入れ過ぎると墨がめくれてしまうし，力を入れないとクレパスが墨にくっつかない。途中で，画用紙の端をめくって転写の具合を確かめるようにする（図14)。転写が完全にすんだらセロテープをはずした。

爪の手入れ用の用具を使って，墨の上に転写されたクレパスの線にそってなぞっていく（図15）。輪郭線をひっかいていくうちに下地のクレヨンの色の変化が見えてくるので，子どもたちはしだいに活動に集中していった（図16）。爪の手入れ用の用具のうちナイフに近い形のものを使うと，墨汁の面が取れて下地のクレヨンの色がはっきと浮かび上がってくる。クレヨンの塗り方が足りなかったりボディーパウダーの量が少ないと，墨汁が直接画用紙に染み込んできれいにクレヨンの色が出てこないようである。

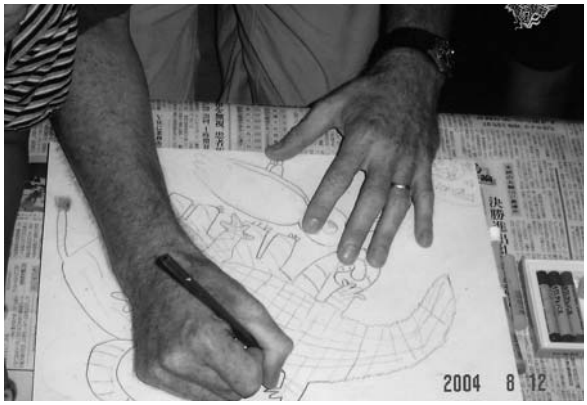


図13. 鉛筆で線をなぞる

図14. 墨汁の上にクレパスが転写される

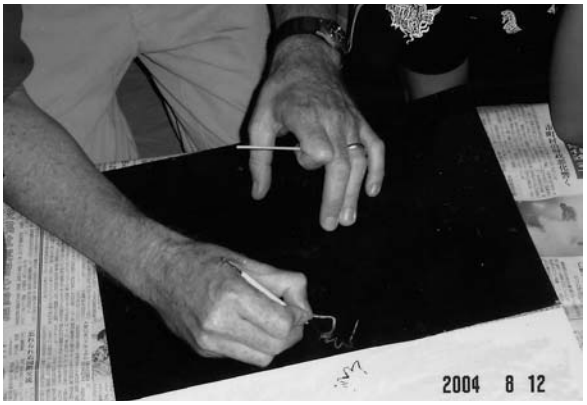


図15. ひっかくと下のクレヨンの色が出でくる

図16. 動物に見えるように丹念にひっかく

輪郭線をひっかく活動が進んできたところで，トム・アンダーソン教授は背景の表現方法を工夫するための参考作品をスライドで示した。子どもたちは，しばしば輪郭線をなぞっただけで完成したと思い込むことがある。その場合，墨を塗った背景の部分は，そのまま残された状態になる。墨の下には様々な色彩のクレヨンで描かれた模様があるので，墨で隠されたままだと表現効果は十分に発揮されたことにならない。そこで，下地の色彩的な模様を見えるようにする方法をいくつか紹介した。

スライドは，動物の輪郭線の周りの背景を削って下地のクレヨンの模様を生かそうとした作品例である。氏が持参したアメリカの子どもたちや現場の教師の作品のスライドである。トム・アンダーソン教授は，「なぞった輪郭線の近くまで色が出るようにけずってみましょう」と言葉をかけて，下記のような表現方法を示した。

「背景の部分に斜めの黒の縞模様を残しながら削る方法もあるよ」（子どもの作品）
「縦と横の黒の線を残して削る方法もあるよ」（子どもの作品）

「動物の曲線にそって黒の曲線の模様をつくる方法もあるよ」（子どもの作品）
「ワニが草むらにいるように，草や葉っぱの形を意識して削る方法もあるよ」（教師の作品）
「逆に周りを黒く残して，動物の中を色でいっぱいにする方法もあるよ」（子どもの作品）

トム・アンターソン教授は，このように完成作品例を示している。それらは，あくまでも参考作品であって，子どもたちが自分にふさわしい表現方法をいくつかの中から選択できるように配慮していた。万一，本来黒く残しておきたい部分をひっかいてしまった場合は，その部分にもう一度墨汁を塗ることが可能であることを伝えた。

（２）２日目の午後の活動（２時間）―スクラッチの完成と鑑賞―

トム・アンターソン教授は，どのようにひっかいて色を出していったらよいのか迷っている子どもには，話をしたり実際にひっかいたりしながら，色の出し方をていねいに個別指導をした（図17）。子どもたちは，動物と背景の関係を意識して，丹念に下地のクレヨンの模様を出していった。ひっかいていくと，隠れている模様が浮かび上がってくる面白さがある。２日間一緒にいるとトム・アンダーソン教授に親しみを覚え，自分から作品をもっていって助言を受けようとする子どもが多くいた。低学年と高学年とでは表現の追究の度合いや進度が異なってきたが，２日間にわたって根気強く取り組み作品を完成させることができた。

図17. 背景の表現方法を助言する

図18. 作品について全体での交流をする

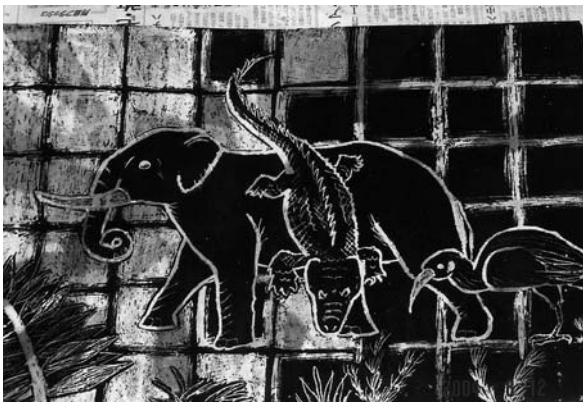


図19. 当日の子どもの作品

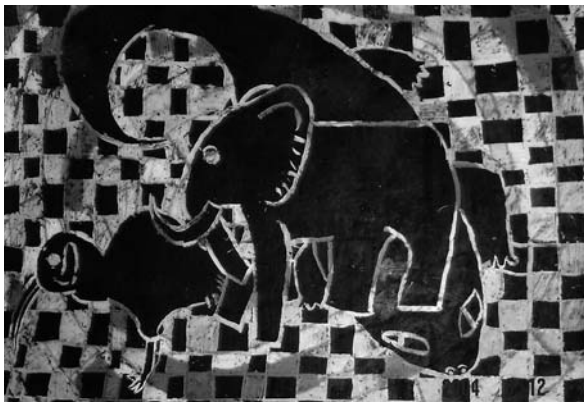


図20. 当日の子どもの作品

完成したタイミングで，全員の作品を並べて相互に作品鑑賞をした。個々に漠然と作品を見てまわることも意味があるが，ここでは，全体での交流の機会をもった（図18)。通訳の問いかけで，「何を描きましたか」「どんなところを工夫しましたか」「感想は」といった内容について，子どもたちが説明をした。話をしながら自分の活動を振り返ることができるし，見ただけでは十分にわからない表現内容や制作過程を知ることもできた。トム・アンダーソン教授は，にこやかな表情で応対し，個々の作品の特徴や頑張った所を見つけだして全体に紹介した。

５．まとめ

子どもたちの作品は，夏期休暇中に美濃市文化会館の壁面に展示することになった（図22)。作品展のように並べると，動物の図案のおもしろさ・クレヨンの色彩模様の美しさ・墨の黒とクレヨンの色彩の対比による表現効果・図案や色の重なりが生み出すイリュージョンなど，一人ひとりの作品のよさを感じとることができた。後日８月17日に美濃市文化会館おいて岐阜県の図工・美術科の教諭が集う夏季研修会が開催されたが，その際に訪れた先生方も色彩的な美しさや構図のユニークさに関心をもち，表現の手順や技法についての質問が多く寄せられた。

今回の実践では，自由に線を描いていろいろなクレヨンで塗っていくという活動があったので，子どもたちは気軽に描くことを楽しんだ。描くものについても，スライドでの動物の資料提示があり，分かりやすかった。動物の図案の構成の方法・クレヨンによる模様の描き方・墨の黒とクレヨンの色彩のコントラストなど造形性を意識することで，低学年から高学年まで広く実践できる発展的な内容を含んでいる。

トム・アンダーソン教授は，日本の子どもたちが熱心に制作に取り組んでいたことに感心していた。とくに動物の細部の形までこだわって観察しながら描こうとする観察力や描写力に優れていること，２日にわたって頑張って表現しようとする根気強さや追究心があることを指摘していた。

子どもたちは，「アメリカのトム・アンダーソン先生から教えてもらえてよい経験になりました」とか「学校とは異なる多くの友達と一緒に作品をつくれてよかった」と感想を述べている。通訳を通して，あるいは，身振り手振りでトム・アンダーソン教授と会話を楽しむ子どもたちも多く，小学生の子どもたちにとって国際交流のよい機会にもなった。絵をもって次々とトム・アンダーソン先生に助言や感想を求めていく子どもたちの様子は，大人よりも積極的である。

また，実践を支援して下さった学校の先生方からは「子どもたちの方がアイデアが豊かで逆に教えられることが多くあった」「一生懸命描いたりひっかいたりしている姿がすばらしかった」といった感想をいただいた。

トム・アンダーソン教授の「クレヨン・スクラッチ」の実践によって，描画指導の可能性を広がり，子どもたちの個性を発揮する機会を増やしていくことにつながるものと考える。同じ教材の中で，動物の絵を描くという具象表現とクレヨンで自在に画面をうめていくという抽象表現とが含まれている。そして，描くという行為とひっかいたり削るという行為が組み合わさっている。さらに，クレヨンの色彩と墨のモノクロとを工夫する活動も展開されている。このような教材のもつ多様性によって，子どもたちの興味や個性が引き出されたといえる。今後，教材としての普遍性をもつためには，様々な学校・学年で実践をしながら，指導方法を検証したり，参考資料を整えていく必要がある。

図21. 作品の完成後，参加者で記念写真

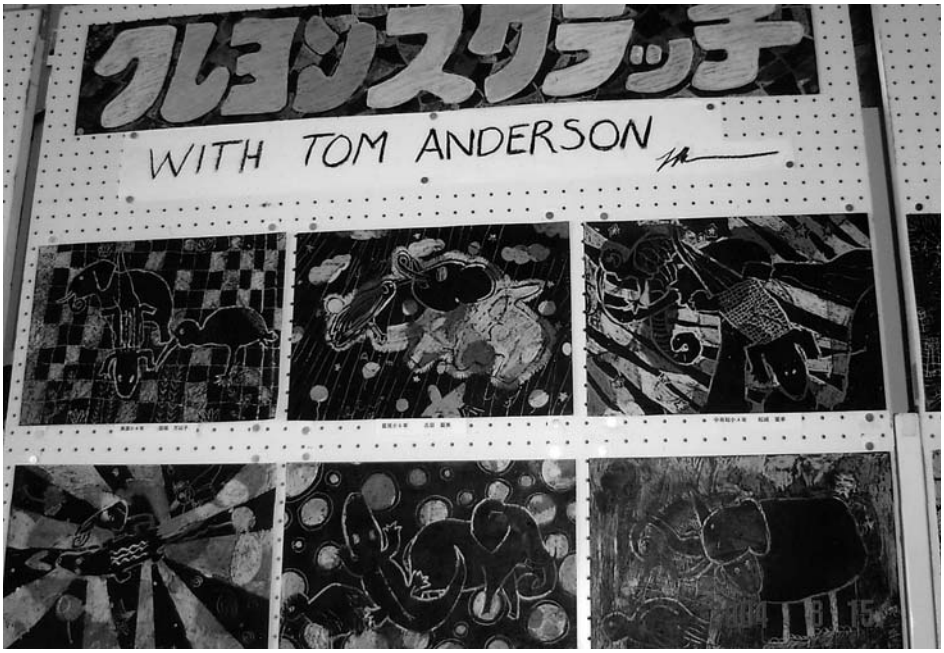


図22. 美濃市文化会館での作品展示

注

1）トム・アンダーソン教授は，現在フロリダ州立大学美術教育学部に勤務されており，1990年から1994年にかけて学部代表を担当した。1949年生まれ（国籍：アメリカ）で，モンタナ大学（美術学士），オレゴン大学大学院（美術教育修士），ジョージア大学大学院（美術教育博士）において美術教育を学んだ。

2）美濃市は1997年から毎年紙の造形をテーマにするアーティストを招聘しアーティスト・イン・レジデンス事業を展開してきた。2004年度で8年目になる。芸術を通した国際交流の継続的な実績が評価され，2004年2月に「第19回国際交流基金地域交流振興賞」を受賞している。

3）「国際子どもワークショップ in 美濃」では，2004年8月11日（水）12日（木）に「クレヨン・スクラッチ」，15日（日）に「ようこそ光の世界へ―キラキラ・ワールド―」，17日に「国際美術教育シンポジウム―美術批評力・鑑賞力の育成―」と「子ども鑑賞教室－アートのみかた・かんじかた－」，18日（水）に「美濃市職人さん大集合」と「昔遊び」，21日に「うだつの町並みにおける絵と書のコラボレーション」などを実施した。

4）キッズ・ゲルニカの実践については，阿部寿文　金田卓也「国際こども平和壁画ワークショップの理念と実践」大学美術教育学会誌　第29号　1997　pp. 145-154，及び，東山明「KIDS' GUERNICA『国際こども平和壁画』の意味」美育文化　1998年12月号　美育文化協会 pp. 46-49，を参照。トム・アンダーソン教授は，平和壁画運動などを通して世界の人々のコミュニケーションが進展すること，多文化を相互理解することなどをめざしている。

5）キッズ・ゲルニカは，日本文教出版の『図画工作6』(平成12年度用) pp. 35-37,『図画工作5・6下』(平成14年度用) P. 40,『図画工作5・6下』(平成17年度用) pp. 32-33　において取り上げられている。

6）たとえば，1998年3月28日に第20回美術科教育学会大阪大会において，「美術教育のポストモダン―ART for LIFE―」と題する講演を行っている。

7）根津三郎『クレヨン・クレパスの本―技法と実践―』(サクラクレパス出版部　1979　p. 32) において墨とクレヨンを組み合わせた技法が紹介されてはいるが，ひっかいた表現効果を強く意識したものではない。

8）クレパスは，サクラクレパスが開発した商品の登録商標である。したがって，クレパスという画材（用語）は基本的に日本で多く使用されている。海外を含めると，クレヨンの柔らかい性質をもつ画材という意味から，ソフトクレヨンという名称が共通理解できそうである。

9）アメリカの美術教育では，1980年代になるとDBAE（学問に基づく美術教育）の動向が顕著になり，美術批評・美術史・美学・制作を領域とした体系的なカリキュラムが編成されている。トム・アンダーソン教授のいるフロリダ州でも，美術批評や鑑賞の学習に着目したDBAEの実践校が多く見られ，鑑賞教材に関する教職員の研修が行われている。

謝　辞

トム・アンダーソン教授の来日と今回の実践に際してお世話になりました石川道政市長，後藤正之教育長をはじめ美濃市の職員の皆様，学校関係者，市民ボランティアの方々に厚謝申し上げます。

また，美濃市文化会館の村瀬伸館長・美濃市立美濃中学校（前任校下牧小学校）の樋口緑教諭・美濃市立中有知小学校の宮西尚子教諭から実践に関するメモや写真等を提供いただきました。ここに記して感謝いたします。

付　記

トム・アンダーソン教授による2004年8月11日（水）と12日（木）の「クレヨン・スクラッチ」の実践は，下記の報道機関で取り上げられた。

・中日新聞　8月13日（金）中濃版
　　「米の先生児童に指南－クレヨンスクラッチで動物画－」（資料1参照）

・朝日新聞　8月26日（木）岐阜県版「外国の先生と絵を描いたよ」（資料2参照）

・岐阜新聞　８月12日（木）中濃地域版

「芸術で国際交流　美濃市で児童45人　米大学教授と作品作り」（資料３参照）

・ＮＨＫ総合テレビ　８月12日（木）18:10〜19:00　NHKニュース　ほっとイブニング

東海北陸　「アートに挑戦　絵画教室」

子どもたちに制作方法を説明するトム・アンダーソン教授＝美濃市文化会館で

米の先生 児童に指南

クレヨンスクラッチで動物画

美濃市文化会館で十一、十二の両日、美術教育が専門のトム・アンダーソン米国フロリダ州立大教授（五四）が小学生ら四十五人に絵画指導をした。（太田　朗子）

美濃　鋭い観察力に驚き

子どもに美術や遊びを伝える、市主催「国際子どもワークショップin美濃」の一環。同教授が平和をテーマに子どもたちと共同で壁画を作る「キッズゲルニカ」は、日本の小学校の教科書にも取り上げられている。

この日指導した絵画の手法は、クレヨンスクラッチ。クレヨンで模様を自由に描き、墨で一面を塗りつぶした上に、下絵を重ね、下絵をなぞるようにひっかいて完成させる。

子どもたちは動物をテーマに作品を作った。同教授は「アメリカの子どもに比べ日本の子どもは動物の細かいところまで描き、その観察力に驚かされる」と子どもたちとの交流に満足そうな様子を見せていた。作品は二日掛かりで完成した。

「ワークショップ」の今後の日程は▽15日　ようこそ光の世界へ―ブラックライトと万華鏡▽17日　国際美術教育シンポジウム、子ども鑑賞教室▽18日　昔遊び、職人さん大集合▽21日　絵と書のコラボレーション▽28日　手作り楽器演奏会。問い合わせは同会館＝電０５７５（３５）０５２２＝へ。

資料１　中日新聞　８月13日（金）中濃版

資料２　朝日新聞　８月26日（木）　岐阜県版

教育

外国の先生と絵を描いたよ

「キッズゲルニカ」提唱者、美濃市に

児童、ひっかき絵習う

米国のフロリダ州立大学で芸術を通した国際文化の相互理解教育を研究しているトム・アンダーソン教授(54)が、美濃市を訪れ、地元の小学生らに絵画指導をした。世界を舞台に活動している美術教育家が直接指導する貴重な機会で、子どもたちは普段とは違った表現法を学び、意欲的に作品づくりに取り組んでいた。

美濃市の市制施行50周年記念事業の一環。地元の子どもと海外から招いた芸術家らが一緒に作品を作るイベント「国際子どもワークショップin美濃」のプログラムで、11、12日の2日間、市文化会館で開かれた。

アンダーソン教授は、平和をテーマに子どもたちと共同で壁画を作る「キッズゲルニカ」の提唱者として知られ、日本の小学校の図画工作の教科書にも取り上げられている。

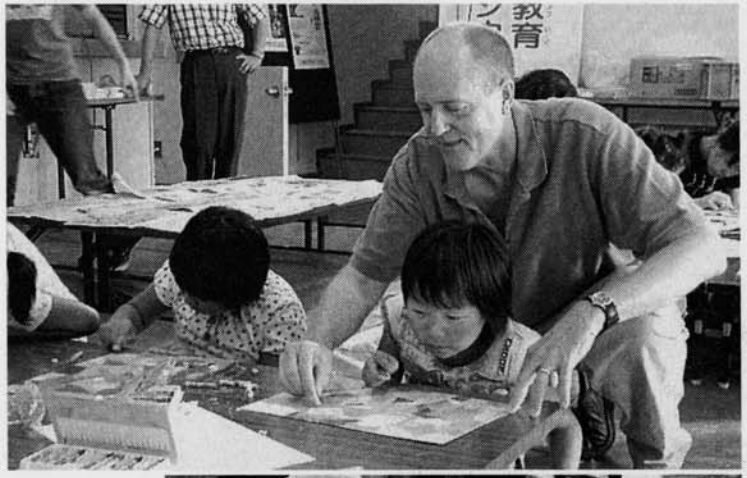
今回は公募で集まった小学校1年～6年の45人に「クレヨンスクラッチ」という画法を指導した。

クレヨンで模様を自由に描き、墨で一面を塗りつぶした上に下絵を重ねる。下絵をなぞるようにひっかいて、最初に描いたクレヨンの色を浮き出させ、一枚の絵を完成させる。

アンダーソン教授は「リラックスして自由に描いて」と指示を出しながら子どもたちの制作にも参加。一緒に色を塗ったり、ひっかき絵についての説明をしたりした。

2日掛かりで作品が完成すると、子どもたちは満足そうな笑顔を見せた。美濃小学校1年の西部佑人君(6)は「黒く塗った画用紙を削ったらきれいな色の絵になったのでうれしかった」と話した。

アンダーソン教授は今回の指導について、「アメリカの子どもに比べると、日本の子どもは動物の細かいところまで描いている。その注意深い観察力は、すばらしい。観察することから発想し、創造力をかりたててほしい」と語った。



上子どもたちに美術指導をするトム・アンダーソン教授　下「クレヨンスクラッチ」に取り組む子どもたち。黒く塗った画用紙をひっかいて、下地のクレヨンの色を浮かび上がらせる＝いずれも美濃市文化会館で

芸術で国際交流

美濃市で児童45人　米大学教授と作品作り

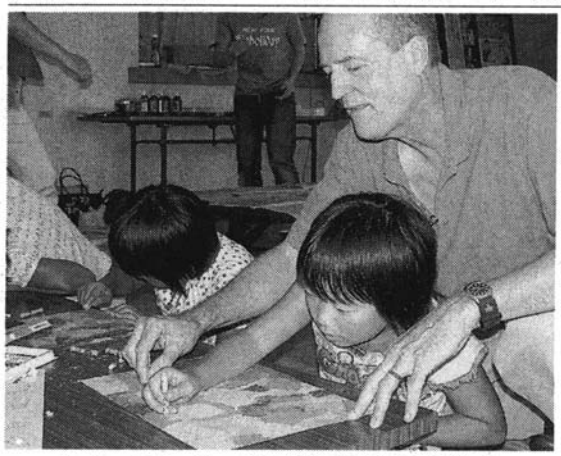
美濃市泉町の市文化会館で十一日、市制施行五十周年記念事業「国際子どもワークショップ in 美濃」の皮切りとして、同市の子どもと海外の芸術家が作品を作るイベントが開かれた。

同事業は、同市の児童と海外の芸術家らが交流しながら絵画などを制作するもので、二十一日までさまざまな参加型イベントがある。

今回は、フロリダ州立大学美術教育学部のトム・アンダーソン教授を招き、絵の表面を削ってクレヨンで描いた下絵を浮かび上がらせる「クレヨンスクラッチ」の技法を用いて作品を作った。

児童四十五人が集まり、十二日の完成を目指して制作に臨んだ。アンダーソン教授は「リラックスして自由に描こう」などと話し、技法を指導。

中有知小六年生の上村美咲さんは「楽しかった。出来上がりが楽しみ」と話していた。



トム・アンダーソン教授と作品を作る児童＝美濃市泉町、市文化会館

資料３　岐阜新聞　８月12日（木）中濃地域版